

論文

## 日誌から探る実習スーパービジョンの実際 — 実習指導者としての社会福祉士の役割 —

内田 充範  
Mitsunori UCHIDA

本稿では、社会福祉士養成課程の実習指導者である社会福祉士が、どのような実習スーパービジョンを展開しているのか明らかにするために、実習日誌の実習生の記述および実習指導者のコメントを21のスーパービジョン要素と比較分析した。

その結果、実習指導者は、まず、実習前半においては、支持的機能を基盤として、中盤からの実習課題への取り組みを通して教育的機能を発揮して、実習スーパービジョンを展開している。また、管理的機能については、事前訪問時の必要事項の確認、実習中の日々の日程確認、ふりかえりにおいて実習の進行管理を中心に行われ、実習終了時の評価へとつながっていることが明らかとなった。

今後の課題として、実習生に対する日誌のスーパービジョンの具体的な記述を指導するとともに、実習指導者に対しては、スーパービジョンを意識したコメントの記述を要望していく必要があると考える。

キーワード：実習日誌、実習スーパービジョン、実習指導者、社会福祉士

### はじめに

2007年の社会福祉士および介護福祉士法の改正により、社会福祉士養成課程における実習指導者要件が、社会福祉士資格を取得して3年以上の実務経験者であり、かつ実習指導者講習会を受講した者とされた。社会福祉士養成のための実習指導者が社会福祉士であるということは当然であるといえは当然であるが、実習指導者講習会受講が義務付けられたことによって、実習指導者に対して実践力に加えて一定水準以上の指導力が求められるといえる。筆者は、2011年度中国地域で開催された実習指導者講習会のスーパービジョン研修の講師の役割を担った。講習会においては、参加された社会福祉士の実習指導にかけるなみなみならない熱意を感じるとともに、演習場面で垣間見られた日々の実践におけるソーシャルワーカーとしての姿勢に直接ふれることで、養成校の実習

担当教員として、実習指導者への期待は、これまで以上に大きく膨らんだ。

このような経験から、実際の実習において、どのようにスーパービジョンが展開されているかということを明らかにしていく必要性を強く感じている。実習スーパービジョンの機会に関しては、「実習生から相談を受けたとき」、「問題が起きたとき」はもちろんのこと、「実習の進行に合わせて定期的（可能な限り毎日）に行う」ものであり、さらには、「実習指導者が実習生にかける言葉や支持、励ましなど、実習生の前で行う援助のすべて」であるとされている（社団法人日本社会福祉士会 2008）。しかしながら、実習中の状況を直接見聞きする機会は、今回の法改正において、必須とされた週1回の養成校教員の巡回指導であり、実習全体のスーパービジョンの状況を把握することはかなわない状況にある。そこで、活用すべき

は実習記録のうちの実習日誌である。実習日誌は、実習生が実習期間中、毎日記述するものであり、さらに、実習日誌には実習指導者のコメントを記載してもらうことになっている。本稿は、この実習日誌の実習生および実習指導者の記述を分析することにより、実習全体におけるスーパービジョンの実際を把握しようとするものである。

## I 実習記録の分析の現状

実習記録の分析に関しては、看護分野においてさかに行われている。

水口、田中は、老人看護学実習後のまとめの記録（学生の援助を通しての学び）を内容分析の手法により分析し得られたカテゴリーおよびサブカテゴリーと高齢者との同居経験との関連性などから実習内容との関連を明らかにしている（水口、田中 2000）。同様に、宮堀、永田、榊は、実習記録内容のうち、「看護の考察」について記述された内容を、古村、中島は、老年看護学実習Ⅰ終了後のレポートを、内容分析の手法を用いカテゴリー（サブカテゴリー）化し、いずれも量的分析により学生の学びを明らかにしている（古村、中島 2003）。これらの分析は、いずれも実習記録から実習生の学びや理解度を明らかにしているものである。

一方、ソーシャルワーク（社会福祉士養成）実習における実習記録の分析に関しては、山口県立大学社会福祉学部横山正博が編集代表となり作成した『「新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習内容の効果測定と妥当性の検証」報告書』の第4章「実習日誌の分析を通じたソーシャルワーク関連科目の内容の検証」第2節実習日誌の量的分析、第3節・第4節実習日誌の質的分析（ソーシャルワーク実習Ⅱ）がある。

まず、量的分析として、合屋は、実習生35名のソーシャルワーク実習Ⅰの8日分、ソーシャルワーク実習Ⅱの15日分の日誌805日分をテキストマイニングを用いて分析し、感性解析等の結果から、実習生のネガティブ体験に対する支持的機能を発揮したスーパービジョンの必要性等を明らか

にしている（合屋 2012）。

次に、質的分析として、横山は、実習指導者のスーパービジョンのポイントとして、①実習生の発見や気づき、まなざしを大切にし、それらを契機に理解を深めさせる工夫をすること、②実習生のステレオタイプの理解もいったん認め、サポートティブに見守る姿勢を持つこと、③修正や多角的な理解が求められる時には、実習生の理解の熟成を待って適切なタイミングで助言すること、④実習生の考えを否定せず、提案型の助言をすること、⑤実習生の考えには、いったん支持的なコメントをし、実習全般に対する動機や意欲を高めたうえで問題意識の醸成を図ること、⑥実習内容に意味づけ、問題意識を投げながらソーシャルワーカーとは何か問い続けることの必要性を提示している（横山 2012）。この報告書において、筆者も質的分析の手法を用いて分析を行ったが、実習全体を見渡す分析の必要性を感じた。

このような先行研究を踏まえて、本稿では、実習記録のひとつである日誌の実習生の記述および実習指導者のコメントを検証することによって、実習指導者が実習生にどのようなスーパービジョンを展開し、その指導力を発揮しているかを明らかにしていくところに特徴がある。分析方法としては、『社会福祉士実習指導者テキスト』の内容から実習スーパービジョンの要素を整理したうえで、それらの要素に該当する実習日誌の実習生の記述および指導者コメントを抽出し、実習日誌から読み取れる実習スーパービジョン要素を示したことである。このような分析を行うことは、同時に、社会福祉士が実習指導をになうことの意義を明らかにしていくことにもつながるものである。

## II 実習スーパービジョンとは

『社会福祉士実習指導者テキスト』によると、実習スーパービジョンの範疇は、「実習期間中に生じる実習生と利用者、実習生と実習担当教員、そして実習生と実習指導者関係」に限られるとされており、①実習契約に基づいて行われる、②実習指導者と実習生との間で実施される、③すべて

の実習生に対して行われる、④定期的に、また必要に応じて随時行われる、⑤利用者ならびに実習生の権利擁護に着目する、⑥養成校の行うスーパービジョンと連動するの6項目を挙げている。そのうえで、実習を通して、「教育要請」としての将来社会福祉の専門家となるための進路指導的な側面に重点を置いた実習指導、「福祉的要請」としての将来の福祉職員の後継者としての期待、「社会的要請」としての社会から将来社会福祉サービス提供者として、一定水準の教育を受け、一定水準のサービスを提供できるようになるという3つの要請に応えるために必要なものがスーパービジョンであるとしている。

また、一般的なスーパービジョン機能に則して、実習スーパービジョンにおいて取り扱う3つの機能の内容を示している<sup>1)</sup>。

さらに、このような要請および機能をふまえて、実習スーパービジョンの実際として、管理的側面、教育的側面の必要性が示してある。

まず、管理的側面に関しては、事前訪問時、実習中、実習終了時それぞれにアセスメントおよびふりかえりを行うものであり、その内容は、以下のとおりとされている。

事前訪問時においては、①実習動機・実習課題の確認、②施設・機関の歴史、制度、機能の理解、③利用者理解、④専門的援助技術の知識、⑤これまでのスーパービジョン体験（コミュニケーション能力含む）である。実習中においては、①実習課題の遂行状況、②組織の体制、役割分担の理解、③実習生としての基本的態度（対利用者関係）、④職員関係形成能力および職員の業務理解、⑤スーパービジョンを通しての学習能力（コミュニケーション能力含む）である。実習終了時には、①実習課題の達成度、②組織の役割と課題の理解度、③利用者との関係形成と個別ニーズ理解度、④社会福祉士として必要な専門技術の理解と習得度、⑤スーパーバイザー能力（コミュニケーション能力含む）の成長度である（日本社会福祉士会 2008）。

次に、教育的側面としては、スーパービジョン

のステップの最終段階（問う・確認する）であるとし、①これまでに学んだ知識や技術と結びつけることによる多面的理解の促進、②実習体験から学ぶべきことの確認、③残された課題の確認があげられている。

なお、支持的側面としての明示はないが、支持的機能で取り扱う内容として、①実習生が将来社会福祉士になろうとしていることを認め励ます、②実習で要求されるレベルとそれを基準とする実習生の能力評価を共有する、③実習生のもつ長所を認め励ます、④失敗が許され、失敗から学べるよう、実習は修正可能な体験を提供する、⑤実習生の個人的体験や感情が実習の邪魔をしていないか、あるいは効果的な援助の障害になっていないかの評価と、その対策を立てるがあげられている（日本社会福祉士会 2008）。

また、実習ノート（実習記録＝日誌）をスーパービジョンに使えるツールの一つとしている。そのうえで、実習ノートによるスーパービジョンの視点として、「事実とそれについての理解がかき分けられているか」、「記録が一方的になっていないか」、「記録者の理解はどの程度あるか」の3点をあげ、さらに、記録されていない点の留意点として、「書かなかったこと」、「書けなかったこと」についての問いかけの必要性を提示している（日本社会福祉士会 2008）。

### Ⅲ 研究の方法および結果

#### 1 研究の方法

分析した日誌は、山口県立大学社会福祉学部における2012年度ソーシャルワーク実習Ⅱを履修し単位取得した学生105人のうち、A福祉事務所で15日間の実習を行った4名の学生の実習日誌60日分である。

対象学生および実習指導者に対し、本研究は日誌の記述内容およびコメントから実習スーパービジョンの実際を分析するものであって、個人の実習内容や考え方、指導内容等を評価するものではなく、公表においても個人や実習機関・施設が特定されることはない旨伝え、日誌の使用について

了解を得た。

まず、前述の先行研究、『社会福祉士実習指導者テキスト』および『2011年度社会福祉士実習指導者講習会テキスト』におけるスーパービジョンに関する記述を参考にして、スーパービジョンに必要とされる要素を、①スーパービジョン契約の締結、②相互理解のための自己紹介（個人的体験・感情の確認）、③実習目標の確認、④実習プログラムの確認<sup>2)</sup>（必要があれば変更）、⑤実習施設・機関の理解度の確認、⑥健康状態の確認、⑦基本的態度（対利用者・職員等）の確認、⑧知識・技術と実践の連結、⑨知識・技術と実践の理解度の確認、⑩考え方・行動の受容、⑪考え方・行動の肯定、⑫考え方・行動の修正、⑬取組姿勢への励まし、⑭課題の進捗状況の確認、⑮課題（日誌を含む）達成への助言・指導、⑯実習目標達成への助言、⑰社会福祉士（ソーシャルワーカー）像の伝達、⑱養成校のスーパービジョンとの連動、⑲実習全般の進行管理（日々の日程確認・ふりかえりを含む）、⑳実習評価、㉑今後の課題の確認、とした。

そして、このスーパービジョン21の要素が、4人の実習生の日誌にどのように記述されて、実習指導者のコメントとしてどのように反映されているか時系列的に分析した。

## 2 結果

4人の実習生の主な実習日誌の記述（「 」で表示）および実習指導者のコメント（〈 〉で表示）とスーパービジョン要素は以下のとおりである。

実習生A

1日目

「実習についての説明と実習スケジュールの確認をした。生活保護や個別支援計画の作成が中心だが、様々な種別の施設見学やA市の福祉施策の講義など興味のわく内容であり、実習に対してますます期待が深まった。また、実習計画や実習目標について実習指導者と個別面談で確認した。これ

まで考えていた目標や興味に加えて、事前学習や就職活動の中で見つけた市役所における福祉事務所の役割や存在意義への関心を実習指導者に伝えることができた。その後福祉事務所の機構と役割の講義を受け、質問の時間を長くっていただき、守秘義務の大切さや生活保護の現状等を理解することができた。」

〈Aさんは就職先として行政機関を目指していて、生活保護業務に興味があるとのことですので、本日の実習は参考になったのではないのでしょうか。連携機関における実習などを通じて、より一層理解を深めてもらえればと思います。3週間という長い期間になりますが、多くのことを学べる機会にしたいと思いますので、体調に気をつけて頑張りましょう。〉

①スーパービジョン契約の締結、②相互理解のための自己紹介（個人的体験・感情の確認）、③実習目標の確認、④実習プログラムの確認、⑤実習施設・機関の理解度の確認、⑥健康状態の確認、⑦基本的態度（対利用者・職員等）の確認

実習生B

4日目

「関係機関との会議において、情報共有することで多方面からの介入が行われ、より良い支援方法を見出し、クライアントを多面的にとらえることができる。改めて連携し情報共有することの大切さを学んだ。」

〈Bさんの指摘どおり、仕事をする上での連携はとても大切です。同じクライアントへのかかわりでも対応する人の立場が変われば難しい問題が驚くほど簡単に解決することがあります。（逆もあります…）〉

⑩考え方・行動の受容、⑪考え方・行動の肯定

14日目

「ケースワーカーは面接時、目を見て話したり、相手が話しているときはうなずいたり、相槌を打つなど、受容と傾聴の姿勢がはっきり感じられた。また、被保護者のマイナスイメージの発言をプラスにとらえられるように言い換えるなど面接能力



の高さを実感した。」

「ケースワーカーの実際の面接を見て、受容と傾聴の姿勢がはっきり感じられたということですが、もし自分がケースワーカーだったらどういう面接や指導をしたか考えてみてください。」

⑧知識・技術と実践の連結、⑨知識・技術と実践の理解度の確認

実習生C

9日目

「個別支援計画の修正で精神的にまいった。昨日の段階でほぼ完成していたが、一からやり直しということで心が折れた。文章の言い回しや長さなど初歩的な問題で実習指導者を巻き込んでしまい申し訳ない。」

「文章表現にやや難があったので指摘しましたが、着眼点や方向性はよかったですから、落ち込むことはありません。文章に同じキーワードが出てくる癖があるので書き終えたら読み直してみるというのではないのでしょうか？個別支援計画もあと少しで文句ない内容に仕上がると思います。頑張りましょう。」

⑬取組姿勢への励まし、⑭課題の進捗状況の確認、⑮課題（日誌を含む）達成への助言・指導

10日目

（生活保護受給者への重複受診に対する指導に関して）「なんだか、その人のためというよりも、ルールだからという理由のためにしか思えず、それは生活保護だからなのかと疑問に思った。ソーシャルワークとは少し違うような気もした。」

「（重複受診は）患者自身の健康面からでも是正すべきものであり、生活保護ケースワーカーはそのことを指導する立場にあります。生活保護受給者以外の方であっても他機関から指導される必要があります。そのあたりは誤解しないようにしてください。」

⑯考え方・行動の修正、⑰社会福祉士（ソーシャルワーカー）像の伝達

実習生D

15日目

「実習指導者と3週間の実習を通して学んだこと実習計画に挙げた目標の達成度等についてふりかえりを行った。ふりかえりを通し、自分の反省点を見直し、さらなる自己覚知につなげたい。」

「いろいろな人に会ったり、施設を見学したりすることで、福祉に対する考えやイメージも随分変わったのではないのでしょうか。福祉に関するだけでなく他の方面についても参考になることがあります。これからの大学での学びや社会に出てからの肥やしになれば幸いです。」

⑳実習評価、㉑今後の課題の確認

また、実習生ごとの日誌から読み取れる実習スーパービジョンの出現数は表1のとおりである。なお、実習スーパービジョン要素⑱については、グループスーパービジョンとして実施しているが、それぞれ実習生ごとにカウントしている。

## IV 考察

### 1 コメントから読み取れる支持的機能を基盤とした教育的機能

実習生に対するスーパービジョンに関して、重岡が、「実習指導者が初期の段階では実習生の積極性やストレスを指摘し支持的機能を多用し、中盤から終盤に具体的な助言や教育的機能を発揮している」（重岡2012）と述べているとおり、実習前半においては、実習生の⑩考え方・行動の受容および⑪考え方・行動の肯定をしながら、中盤からの実習課題への取り組み過程において、具体的な⑮課題達成（日誌を含む）への助言・指導を実施している。実習生Bの4日目では⑩考え方・行動に対する受容および⑪考え方・行動の肯定をし、必要に応じて実習生Cの10日目では⑫考え方・行動の修正がなされるなど教育的機能が存分に発揮されている。また、実習生ごとの出現数の違いに関しては、実習生一人ひとりが抱えている課題によって差が生じている。例えば、実習生Cは実習課題の一つである個別支援計画の作成に関し

表1 実習生別日誌への実習スーパービジョン要素の出現数

実習スーパービジョンの21要素	管理	教育	支持	A	B	C	D	計
①スーパービジョン契約の締結	◎			1	1	1	1	4
②相互理解のための自己紹介（個人体験・感情の確認）			◎	1	1	1	1	4
③実習目標の確認	○	◎		1	1	1	1	4
④実習プログラムの確認（必要があれば変更）	◎	○		1	1	1	1	4
⑤実習施設・機関の理解度の確認		◎		1	1	1	1	4
⑥健康状態の確認	◎			1	1	0	0	2
⑦基本的態度（対利用者・職員等）の確認	○	◎		1	1	1	1	4
⑧知識・技術と実践の連結		◎		6	6	5	4	21
⑨知識・技術と実践の理解度の確認		◎		6	2	4	4	16
⑩考え方・行動の受容		◎	○	2	5	6	3	16
⑪考え方・行動の肯定		◎	○	6	7	2	6	21
⑫考え方・行動の修正		◎		0	2	2	3	7
⑬取組姿勢への励まし			◎	5	3	5	3	16
⑭課題の進捗状況の確認	○	◎		3	3	4	3	13
⑮課題（日誌含む）達成への助言・指導		◎		4	3	4	3	14
⑯実習目標達成への助言・指導	○	◎		5	1	3	1	10
⑰社会福祉士（ソーシャルワーカー）像の伝達		◎		1	7	4	6	18
⑱養成校のスーパービジョンとの連動	○	◎		2	2	2	2	8
⑲実習の進行管理（日々の日程確認・ふりかえり）	◎	○	○	28	28	28	28	112
⑳実習評価	◎	○		1	1	1	1	4
㉑今後の課題の確認	○	◎		1	1	1	1	4

◎：主たる機能、○：関連機能

て、文章表現についての指摘などから一時的に実習意欲の停滞があったが、実習指導者の懇切丁寧な指導により、やる気を取り戻し、最終的に完成している。このため、他の実習生に比べ、⑭課題の進捗状況の確認、⑮課題（日誌を含む）達成への助言・指導の出現数がやや多くなっている。さらに、ここで注目すべきは、中盤以降も助言指導と合わせて、⑬取り組み姿勢への励ましを行っている点である。このことは、植田が、「実習が学校教育の一環でもあることから、教育的な側面が強調されやすいが実習生への支持的な側面が前提にあつてこそ教育的な側面が生かされる」（植田2000）と述べているとおり、実習指導者のコメント全体から実習指導者が実習生の思いに寄り添っている感じが感じ取れ、支持的機能を基盤として教育的機能を発揮していることが読み取れる。

山本が実習指導者の視点として、児童とのかかわりを通して「ソーシャルワーカーとしての価値」、「知識」、「感性」といった専門職としての視点を投げかけながら、大学での学びと実践現場とを結びつける役割を明らかにしている（山本2012）ように、教育機関で学んだ知識・技術と実践現場での体験をつなぎ、理解することは実習において最も重要なことである。さらに、実習生Bの14日目では、「もし自分がソーシャルワーカーだったらどういう面接や指導をしたか考えてみてください。」というように、⑧知識・技術と実践の連結から、⑨知識・技術と実践の理解度の確認のために実際にやってみよう促し、実践からの知識・技術の修得を目指していると言える。

⑩考え方・行動の受容、⑪考え方・行動の肯定、⑫考え方・行動の修正の関連性については、受容

から肯定と読み取れるコメントは多く見られたが、修正を必要とする場合に、横山が、「実習生のステレオタイプ的な理解もいったん認め、サポートティブに見守る姿勢を持つこと、修正や多角的な理解が求められる時には、実習生の理解の熟成を待って適切なタイミングで助言すること」(横山 2012) と述べているように、まずは受容してしてから指摘し、修正を促すというコメントはなかった。先述したように、全体的には支持的機能を基盤にスーパービジョンが実施されているが、個別事項に関する助言・指導において、実習生の考え方・行動を修正する場合の留意点として横山のあげているポイントはまさに究極の支持的スーパービジョンといえよう。

## 2 要素出現数から読み取れる管理的側面

『社会福祉士実習指導者テキスト』の管理的側面の分類にある事前訪問時、実習中、実習終了時という時系列に要素出現数をみることにする。

まず、事前訪問においては、実習生Aの1日目<sup>3)</sup>の記述から、スーパービジョン要素の①～⑦が実施されていることが読み取れる。個別面談を行い、実習生が抱えている不安や疑問を解消するとともに、実習生自身から実習への思いを語らせることによって、基本的な理解度の確認を行っていると言える。本来、事前訪問は管理的機能が多用される場面であるが、じっくりと実習生の声に耳を傾ける傾聴の姿勢がうかがわれ、ここでも実習指導者の支持的機能がうかがわれる。ただし、①スーパービジョン契約の締結に関しては、実習生と実習指導者であるという確認にとどまっておらず、スーパービジョンという言葉は使用されていない。実習生は教育機関において、スーパービジョンという言葉を使い慣れているため、今後、実習指導者が積極的にスーパービジョンを実施するという宣言をしていく必要がある。

次に実習中は、⑩実習の進行管理(日々の日程確認・ふりかえり)が実施されており、管理的機能を基盤としながら、先述したように教育的機能・支持的機能を発揮していると言える。

最後に実習終了時においては、実習生Dの日記にあるように、実習全体のふりかえりを行い、⑫実習評価として実習計画に掲げた実習目標の達成度を評価するとともに、反省点から今後につながる自己覚知へとつなげ⑬今後の課題の確認をしている。

このように、実習スーパービジョン要素の出現数から、事前訪問時の各種必要事項の確認、実習中の毎朝の日程確認と一日の終了時のふりかえり、実習終了時の評価などの管理的機能の徹底が読み取れる。

## 3 実習スーパービジョンから職場内スーパービジョンへ

先述したように、実習日記の検証から、実習指導者はほとんどのスーパービジョン要素を実践している様子がうかがえた。このことは、実習指導者講習会受講の効果であると考えられる。実習指導者に指導者講習会の受講が義務付けられたことにより、実習指導者は体系的に実習スーパービジョンの理解を深めスーパービジョン能力を修得している。そして、その修得した能力を実習という一定の期間が定められた中で、どのように効果的に発揮するか熟慮の上、実践していると言える。

社会福祉の実践現場においては、スーパービジョン的な実践は行われているが、スーパービジョンの理論やポイントなどを意識した実践でないために、その実践をスーパービジョンとして位置付けることができず、また、組織によって認識された実践でないためにスーパービジョンが業務として成り立っていないと言われてきた(植田 2000)。しかし、スーパービジョンの意義は、ソーシャルワーク実践において、より良い援助を展開していくために、スーパーバイザー自身の成長を通して、利用者へのサービスの質の向上を目指すことである(相澤 2006)。ならば、社会福祉士が実習指導者として、ソーシャルワーク実習において実践しているスーパービジョンを職場内で展開していく必要がある。実習スーパービジョンをそのまま現場実践におけるスーパービジョンに取り

入れるのではなく、実習指導者講習会で学んだスーパービジョンの理論やポイントを実習を通して、社会福祉士自身がスーパーバイザーとしての実践を行い、その実践の中からスーパーバイザーとしての課題を捉え、職場内実践に応用していくことこそが、社会福祉士養成教育の充実を図ることと同時に、社会福祉士が実習指導者を担うことの意義と考える。

## V 本研究の限界と今後の課題

本研究において、実習日誌を実習スーパービジョンの検証に用いたことは、実習全体の状況を把握するための有効なひとつの手段であったと考えるが、実習内容や実習指導者とのやり取りが具体的に記述されていないために、どのようなスーパービジョンが行われたかが不明な部分が多々あった。今後の研究課題としては、実習生および実習指導者の双方に聞き取り調査を行い、その内容まで吟味しなければならないと考える。また、実習生に対しては、日誌の書き方に関して、どのような助言・指導が行われたかを記述するよう指導するとともに、実習指導者に対してもスーパービジョンを意識したコメント記載について要望を行う必要があると考える。

## 注

- 1) 植田は、スーパービジョン機能について、これらの3機能に、評価機能を加えた4機能と定義しているが、本稿では評価機能を管理機能に含める。
- 2) 本来、実習スーパービジョンの中にプログラム作成も含まれるという考え方もあるが、社会福祉士実習指導者講習会においては、「実習マネジメント論」、「実習プログラミング論」、「実習スーパービジョン論」に分かれており、実習プログラムは、実習開始（事前訪問）以前に作成されており、実習スーパービジョンにおける要素としては、実習プログラムの確認および必要に応じての変更とした。
- 3) 本学のソーシャルワーク実習Ⅱでは、事前訪

問を1日（8時間）かけて行い、実習生は、実習1日目として実習日誌を書いている。

## 参考文献

- 相澤譲治（2006）『スーパービジョンの方法』、相川書房、3ページ。
- 植田寿之（2000）『ワーカーを育てるスーパービジョン—よい援助関係をめざすワーカートレーニング—』、社会福祉法人奈良県社会福祉協議会編集、中央法規出版、10ページ、前文、173～174ページ。
- 植田寿之（2002）「スーパービジョン」『ソーシャルワーク』、黒木保博・山辺朗子・倉石哲也編集、194～195ページ。
- 合屋さゆり（2012）「第4章実習日誌の分析を通じたソーシャルワーク関連科目の検証第2節実習日誌の量的分析」横山正博編集『新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習内容の効果測定と妥当性の検証』報告書』、山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科、81～93ページ。
- 古村美津代、中島洋子（2003）「健康な高齢者とのふれあいを通しての実習の学び—実習記録の分析から—」『老年看護学』Vol.8No.1、78～85ページ。
- 重岡修（2012）「第4章実習日誌の分析を通じたソーシャルワーク関連科目の検証第3節実習日誌の質的分析（ソーシャルワーク実習Ⅰ）1. 障害者施設」横山正博編集『「新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習内容の効果測定と妥当性の検証」報告書』、山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科、93～96ページ。
- 社団法人日本社会福祉士会（2011）『2011年度社会福祉士実習指導者講習会』。
- 社団法人日本社会福祉士会編集（2008）『社会福祉士実習指導者テキスト』、266ページ。
- 水口陽子、田中キミ子（2000）「特別養護老人ホームにおける老人看護学実習の学習内容—実習記録の分析から—」、『老年看護学』Vol.5No.1、131～139ページ。
- 宮堀真澄、永田美奈加、榊紘子（2007）「患者の



語りから看護学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護一瞥センター実習記録内容の分析から一」『日本赤十字秋田短期大学紀要』第12号、37～45ページ。

山本佳代子 (2012) 「第4章実習日誌の分析を通じたソーシャルワーク関連科目の検証第3節実習日誌の質的分析 (ソーシャルワーク実習Ⅰ) 3. 児童養護施設」横山正博編集『「新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習内容の効果

測定と妥当性の検証」報告書』、山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科、98～99ページ。  
横山正博 (2012) 「第4章実習日誌の分析を通じたソーシャルワーク関連科目の検証第4節1. 高齢者施設 (特別養護老人ホーム)」横山正博編集『「新カリキュラムにおけるソーシャルワーク実習内容の効果測定と妥当性の検証」報告書』、山口県立大学社会福祉学部社会福祉学科、99～102ページ。

## Facts about Training Supervision by Looking into Daily Records : The Role of Social Workers as Training Instructors

Mitsunori UCHIDA

In this paper, a comparative analysis of trainees descriptions and training instructors comments from daily records of the training with 21 supervision elements will be performed in order to make clear the way the social workers, who are the training instructors of the social worker education curriculum, are developing training supervision.

As a result, the training instructors begin by building the first half of the training on supportive function. Then, from the middle stage, they develop training supervision by displaying the educative function through implementation of training assignment. Moreover, as far as managerial function is concerned, it is carried out mainly through verification of requirement during pre-assessment visit, verification of the daily program during the training and through a progress control of the training by assessing it afterwards. The link with the evaluation at the end of the training was obvious.

As a future challenge, we think that it is necessary to teach concretely to the trainees how to take daily notes about supervision and to require training instructors to take into account supervision in their comments.

Key-words: Training daily records, Training supervision, Training instructors, Social workers